

アーカイブの重要性

先日の国際数学者会議において、第一回ガウス賞を伊藤清先生が受けられた。僭越ながら、改めて先生に心よりのお慶びを申し上げたい。

伊藤清先生は特に若い人たちにはもはや伝説上の人物であるかも知れない。まして、確率微分方程式のアイデアが最初に発表されたという「全国紙上数学談話会」という数学誌の存在をご存知の方はどれほどおられるだろうか。確か、大阪帝国大学理学部創設時の新進気鋭の数学科教官たちによって創刊されたと聞いた記憶がある。同誌には、伊藤先生の上述の論文以外にも、今日では伝説的となった多くの数学者の独創的な論文が初出の形で発表されている。しかし、同誌を所蔵している研究機関はそれほど多くはないのではないかと。筆者は見たことがあるが、どこのことであつたかはっきりしない。今回、ウェブで検索した限りでは、13機関（第2輯となると8機関）のみであつた。多くは集密書庫にあるようで、一般の眼にたやすく触れるものではなくなつたようである。謄写刷りのしかも後期には粗悪な紙質のものであつた。しかし、拾ひ読みした論文からは、何か温かい（当世流に言えば、懐かしい）感じを受けたことを覚えている。

「理系への数学」の巻頭で提案するのはいささか憚られるかも知れないが、「全国紙上数学談話会」を早急にマイクロフィルム化（及びウェブ化を含め電子媒体化）すべきだと思う。他にも、例えば「数学の歩み」もそうすべきであろう。敗戦後の東大や周辺の大学の数学教室の雰囲気伝えるものであるが、ここにも伝説上の人たち、谷山豊先生や同年輩の方々の活躍の様子を見ることができるのである。伝統ある数学教室には、いずれも周辺に似たような刊行物があつたのではないかと。それらもマイクロフィルム化（及び電子媒体化）し、後世の数学関係者の共有資料とすべき努力を払うべきだろう。これらは、ある時代の生の雰囲気を伝える資料である。同時代の方には赤面の種に過ぎず、保存公開の動きには反発さえあるかも知れない。しかし、上掲の「全国紙上数学談話会」や「数学の歩み」などからは、後世名を成した先達の若い頃の様子を探ることができるだけでなく、欧文化された論文ではなかなか表出されない、著者自身の息吹をも感じ取ることができるのである。

ところで、明治期の組織的な欧米文化導入から1世紀半近く経った。ハードの典型ともいえる洋風建造物の場合でも、震災やら戦災で失われ、さらに昭和初期建造で近年まで使用中のものも建替えや増改築によって急速に姿を消しており、建築学会が警鐘を鳴らしていることはご承知だろう。ソフトでは、例えば、われわれに関心の深い数学の教育や研究に関してもかつての様子を正確に知ることは難しくなっている。「全国紙上数学談話会」は昭和初期の帝国大学の水準を示す資料でもある。この時期の実情を示す証拠を、二次資料ではなく、現物に近い姿で、しかも触れやすい形で残すことは重要なこ

とである。できる限り当事者自身の記憶とともに後世に伝えたいと考え、もはや先送りの猶予はないのではないだろうか。

中学・高校の水準でも、関心のある生徒のために、教科書の変遷が直にわかるように過去の教科書を堅牢に製本して学校の図書室に置いておくことは勧められてよいであろう。当該の学校での使用教科書に限ってもよいが、この場合でも、いざ試みようとするに相当の困難が予想される。全面的に行なうには何がしかの機関による支援がこのために必要とされるかもしれない。しかし、限定的な形ならばすでに実行されていることかも知れない。特定の教科の教材研究といった類の話題ではないし、ほとんどの生徒には関係ないことのように思われるかも知れないので、この点にも余り確信はないが。しかし、生徒からすれば先輩たちの経験を多少とも共有できる機会を保障することになるであろうし、若手の教員から見れば先輩教員の背景を知ることができるのである。

上記の一部は、「数学史の研究」研究集会（京大・数研・ICMの時期）の懇親会の席上でも、時節柄、話の種になった。研究集会では、主に、和漢洋巫の数学が話題になり、和漢の数学のほか、ガウス、フーリエなども論じられた。ちなみに、場違いと思いつつ、筆者は、画家アルブレヒト・デューラーによる幾何学に準拠した絵画技術書の紹介をした。この絵画技術書にはケプラーやガリレイなども目を通しており、挿図には後にユークリッド原本の注釈に利用されたものもある。最近、マテオ・リッチらイエズス会士によるユークリッド幾何学原本の漢訳に、種本の注釈経由で、この挿図が載せられていると聞いた。デューラーの技術書は和算とも無縁ではなかったかも知れないと思われるが、証拠となるような文献類は残されていないのではないだろうか。